

館蔵資料から読みとく「中山道と桶川」

桶川市歴史民俗資料館 林 かおる

はじめに

桶川の街の歴史は、江戸時代に五街道の一つとして整備された中山道の宿場である桶川宿を中心として始まる。中山道桶川宿をとおして紡がれた文化や伝統は、現在の桶川の礎となった。小企画展示では、当館に寄せられた桶川宿に関連する資料を基に構成し、その中でも特筆すべき史料を読みとくことで、江戸時代の桶川に生きた人々の姿を紹介する。

1. 中山道と桶川宿の成立

【史料1】江戸大節用海内蔵^{え だいせつようかいだいぐら}

節用集とは、室町時代中期から昭和初期にかけて出版された一種の家庭用百科辞典である。江戸時代中期頃から街道や名所の挿図、地図や作法などの附録が充実していき、様々な情報を節用集一冊で得ることができた。展示している記事は、「木曾街道(中山道)」で、板橋から京都三條大橋まで描かれている。

2. 桶川宿成立期の絵図

【史料2】桶川宿古絵図(市指定文化財)

元禄7年(1694)に行われた検地にあたって、桶川宿付きの秣場争論の過程を描いたものと推定される絵図である。中央には中山道が通り、宿の入口には木戸、そして中央には高札が描かれ、道の両脇には検地帳に登録された名請人の名前が見られる。現存が確認されている桶川宿絵図のうち、唯一「木戸」が描かれている。

3. 桶川庶民の旅

【史料3】日本百番神社仏閣納経塔^{にほんひゃくばんしんじやぶつかくのうきやうとう}

下中町で穀物問屋を営んでいた大坂屋清右衛門が、西国三十三ヶ所・坂東三十三ヶ所・秩父三十四ヶ所をあわせた百番観音巡礼を行い、文政13年(1830)に妻ふよが屋敷内に「日本百番神社仏閣納経塔」を建立した際の諸経費が記載された史料。

【史料4】道中日記帳

坂田村の修験者である本学院・齋藤林静は、安政 3 年(1856) 上州草津へ旅をし、中山道の各宿場を通り、茶漬やうどんなどを食べながら草津に入った。草津では、「草津の五湯」と称される温泉をめぐり、その効能を日記に記した。

【史料5】中山道宿名(善光寺街道)

善光寺宿の本陣・藤屋平兵衛によって刊行された刷物で、中山道日本橋から善光寺への参詣に向かう旅人に向けた里程表である。各宿場の旅籠の名前が墨書きで記され、桶川宿のところには、「栗原権左衛門」の名前がみられる。

4. 皇女和宮の江戸下向

【史料6】^{うわさ}噂^{ききがきはなしのたね}の聞書噺之種

江戸時代、巷であふれる噂や出来事を速報で伝える刷物として瓦版が普及していた。この史料の最初の記事は、文久元年(1861)の和宮降嫁についてである。和宮が京を出発する前に宇治の石清水八幡宮や八坂の祇園社へ参詣したことにも触れられているなど、庶民の間でも高い関心が持たれていたことが分かる。一方で、万延元年(安政7年、1860)3月に起きた桜田門外の変などの政治事件は掲載されておらず、芸能や寺社の開帳など庶民の噂話をまとめたものとして大変興味深い。

おわりに

今回の小企画展示では、歴史民俗資料館に寄贈・寄託された古文書を読みとくことで知ることができた、中山道桶川の歴史をまとめました。江戸時代の桶川に生きた人々は、現在に生きる人々と同じように土地の問題を抱えていたり、タブに出かけたり、そして旅に来た人を受け入れながら、新たな分家や伝統などを築いていきます。古文書を読みとくことで、桶川の新たな一面を知っていただけたら幸いです。

今後も古文書の解説を通して桶川の歴史を深めていき、桶川市内外の方々へ桶川の魅力をお伝えしていきます。